
けいおん！ - 目覚めぬ夢 -

しのぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！ - 目覚めぬ夢 -

【Nコード】

N0355S

【作者名】

しのぶ

【あらすじ】

毎日訪れる平和な日常、いつもと同じ放課後・・・の筈だったのに・・・私だけがみんなの居る世界から弾き出されてしまったみたい・・・どうしてこんな事になってしまったのかしら・・・私は悪い夢でも見ているの？・・・それとも・・・今まで過ごして来た世界の方が夢だったと言うの？

- 前編 -

まだ誰も来てないわよね・・・

唯ちゃん日は直で遅くなるって言ってたし、りっちゃんと澪ちゃんは学園祭の事で職員室に呼ばれてたからまだ来ないと思うし・・・

私は音楽室の扉をそつと開けて中を覗きました。

思った通り今日は私が一番乗り♪

と言う事は、梓ちゃんが来たら暫くは2人つきり・・・

こんな状況つてもしかしたら初めてかもしれないわね・・・ちょっとドキドキしてきちゃった。

そうだ！

みんなを待つてる間お茶を飲めるように、先に2人分だけ用意しておきましょう♪

紅茶は昨日届いた『ノスタルジー・イスタンブル・オリエント・エクスプレス』がいいわね。

私も初めて飲むお茶だけど美味しいって評判だからきつと喜んでくれるわよね♪

うふふ♪ 梓ちゃん早く来ないかしら。

・ ・ ・ ・ ・

あれ？ 何、この匂い？・・・ガスみたいな・・・

あ！！！！

ポットのお湯が吹きこぼれて、火が消えてる！

危ない所だったわ！ 知らない間にウトウトしちゃってたのね。
まだ誰も来てないみたいだし早く窓を開けて換気しなきゃ・・・

梓「遅くなつてすみません、掃除中に純がバケツをひっくり返して・・・
って、何ですかこの匂いは？ 唯先輩！ またコンロを使って
吹きこぼしてるんじゃないんですか？！」

紬「あ・・・ごめんなさい・・・吹きこぼしたのは唯ちゃんじゃなくて私なの・・・」

梓「え？ あの・・・どちら様でしょうか？」

紬「どちら様って・・・」

梓「ああ、唯先輩のお友達ですね、初めまして、私は軽音部2年の
中野梓と言います」

紬「ちょ、ちょっと梓ちゃん、いったい何の冗談なの？」

梓「?????」

紬「そんな・・・本当に私の事が分からないの？」

梓「ちゃんに何があったの？ まさかどこかで転んで頭でも打った
とか・・・

だしたら直ぐに保健室に！

ううん、それより救急車の方が・・・

律「おいゝゝす！ ん？ まだ梓だけしか来てないのか？」

漣「唯はまだ日直の仕事終わってないみたいだな」

紬「あ、りっちゃん漣ちゃん！ ちょうどいい所に来てくれたわ！
梓ちゃんの様子が変なのよ！」

律「り・・・りっちゃんって・・・」

紬「梓ちゃんが私のこと知らないって言うの！」

漣「はあ？ そりゃ梓は2年生だし、交流の無い3年生の名前まで
知ってる訳ないだろ？」

紬「え？・・・澪ちゃんまで何を言い出すのよ・・・」

律「ってかどうしたんだよ紬？　いつもは田井中さんって呼ぶくせに」

・・・

そっか・・・分かつちゃった♪

3人で私の事からかって遊んでるのね・・・そんな悪戯には引つかからないんだから。

紬「うふふ、3人共もういいわよ、そろそろ唯ちゃんも来る頃だと思っし、すぐにお茶の準備をするから座って待っててね」

唯「遅くなりましたりっちゃん隊長！　日直の任務を終えて只今参りましたあ！」

紬「あ、唯ちゃん、今お茶淹れてるから少しだけ待ってて」

唯「あれ？　紬ちゃん軽音部に何か用があつたの？」

紬「うふふ、唯ちゃん、その悪戯はバレてるから続けなくてもいいのよ」

唯「ねえりっちゃん・・・紬ちゃんどうしたの？　ちょっと変じゃない？」

律「いや・・・私もよく分かんないんだけど」

漣「たぶん疲れてるんじゃないのか？ 合唱部はウチと違って大所帯だからな」

もう・・・今日はみんな演技がリアルすぎるわ。

でもお茶を淹れたら唯ちゃんが我慢できなくなって『ムギちゃ〜ん』って甘えてくると思うし。

そうしたら『あら、私の事知らないんじゃないの？』って意地悪しちゃうかしら♪

って・・・あら？ 食器棚が無い・・・

紬「ねえ？ ここにあつた食器棚どこかに移動したの？」

律「はあ？ 食器棚？」

唯「りっちゃんアレの事じゃない？ 合唱部で有名な」

律「ああ！ いつも私達が羨ましい〜って話してたやつな」

紬「いったい何の事を言ってるのよ？」

唯「紬ちゃんって合唱部でいつもお茶会をしてるんでしょ？」

律「そうそう、立派なティーセットを部屋に持ち込んで」

梓「でもそれだったら食器棚は合唱部の部屋にあるんじゃないんですか？ ここにある訳ないと思いますけど」

律「だよな？」

漣「今日の紬は本当におかしいぞ・・・帰って休んだ方がいいんじゃないか？」

紬「もう！ いい加減にしてよ！」

漣「！！！！！！」

唯「紬ちゃん・・・合唱部で何か嫌な事でもあったの？」

律「同じ部長同士、苦労は痛いほど分かるぞ！ もし私でよかったらいつでも相談に乗るから」

漣「って、いつお前が苦労したんだよ！」

律「あのな！ 私だって軽音部の為に色々考えてるんだぞ！」

梓「とてもそうは見えませんがね」

律「なにおおー！」

唯「あはは、それは酷いよあずにゃん」

みんな・・・一体どうしたって言うのよ・・・

とても悪戯の為に芝居をしてる様には見えない・・・

それどころか私が居ないのが当たり前みたいに自然に時間が過ぎていく・・・

そうだ！ 斉藤に連絡すれば何か分かるかもしれないわ！

紬「もしもし斉藤？」

『はい、何か御用でしょうかお嬢様』

唯「あゝ！ 紬ちゃん、今電話してるのってもしかして噂の執事さん？」

律「すつげえゝ！ 本当に居たんだな」

紬「変な事聞いて悪いんだけど私って何クラブに入ってたか教えて！」

『お嬢様は桜ヶ丘高校に御入学されてすぐに合唱部に入部されましたが、それがどうかされましたか？』

紬「合唱部・・・そんな・・・」

『本日も放課後に30人分のケーキをお持ちすれば宜しいのですよつか』

紬「え・・・ええ・・・」

唯「ねえねえ紬ちゃん！ 今日執事さんにお菓子運んでもらうんですでしょ？ いいなあゝ、私も合唱部にすればよかったゝ」

梓「唯先輩！ 何バカな事言ってるんですか！」

唯「冗談に決まってるじゃない、怒らないでよあずにゃん」

梓「はいはい、分かりましたからもう頬擦りは止めて下さい!」

嘘・・・こんなの嘘よ・・・

だって私は・・・

紬「ねえ、りっ・・・田井中さん」

律「ん? どした?」

紬「私と初めて会った時の事覚えてる?」

律「初めてって・・・1年のクラスで自己紹介した時の事?」

紬「そうじゃなくて、軽音部の勧誘の時」

律「ああ、そっちな・・・確か私と漣が音楽室で待ってた所に紬が来たんだよな」

紬「そうそう、その後は?」

律「紬が『合唱部の部室はここですか?』って聞いてきたから『合唱部はここじゃなくて第2音楽室ですよ』って教えてあげて」

紬「・・・・・・・・・・」

漣「それは私も覚えてる！　そのあと律と喧嘩したからな」

律「うん、漣が『どうして部員を増やすチャンスだったのに誘わなかったんだよ！』ってえらい剣幕で怒鳴って」

漣「あはは、懐かしいな」

私は合唱部に行ったの？・・・

合唱部の部室に行つて、軽音部には入らなかったって事？・・・

紬「じゃあ軽音部はどうなったの？　部員が足りなかったんじゃないの？」

律「その後暫くして唯が来てくれたんだよな」

唯「うん、——ちゃんと見学に来たの」

え？　誰？

よく聞き取れなかった・・・と言うか声そのものが無かったよう
な・・・

紬「ごめんなさい、よく聞こえなかったの・・・誰と見学に来たの？」

唯「——ちゃんだよ、3年生になってクラスは別々になっちゃったけど1年の時は同じクラスだった——ちゃん」

紬「・・・・・・・・・・」

漣「確か唯は軽音楽って『軽い音楽』だからカスタネットだけ出来たらいいって思ってたんだよな」

梓「何ですかそれ・・・」

唯「あうゝ・・・漣ちゃんそれは言わないでよぉ」

律「——も唯の考えを聞いて驚いてたけど、いい機会だからって」

唯「うん、——ちゃんも一緒に入ってくれるって言っから」

紬「えっと・・・その人がキーボードを担当してるのかしら・・・」

唯「うん！——ちゃんってキーボードすっごく上手なんだよ！」

漣「曲を作るのも上手いな」

私の居ない軽音部・・・

私が居なくても何の問題もなく進んでる時間・・・

みんなにとってはこれが日常なの？

間違ってるのは私の方？・・・

そんな訳ないわ！

だって私はちゃんと覚えてるもの！

このままじゃもう頭がおかしくなりそう・・・お願い、誰か助けて！

- 中篇 -

私は悪い夢を見てるんだわ・・・

そう、今こうしてみんなとお話してるのも全部夢！ 目が覚めたらきつと元に戻ってる筈よ！

唯「紬ちゃん大丈夫？ 凄く具合悪そうだけど」

紬「え？ う、うん・・・ごめんなさい、今日はもう帰るわね」

漣「そうした方がいいと思うぞ」

律「合唱部には私から伝えておくから安心して休むといいよ」

私は斉藤に電話を掛け、急いで家へと帰る事にしました。

『お嬢様、お顔の色が優れませんがお体の具合でも悪いので御座いますか？お屋敷に戻られる前にお医者様に診て頂いた方が宜しいのでは？』

紬「ううん、いいの・・・一晩眠れば元に戻ると思うから・・・心配かけてごめんなさいね」

家に着いた私はまっすぐに自室へと向かい、そのままベットに倒れこむ様に横になりました。

訳の分からない状態に疲れ果てたのか私は着替える事も食事を
する事も忘れ深い眠りに落ちました。

いつもと同じ朝が来る事を信じながら・・・
私の知っている朝が訪れる事を祈りながら・・・

・
・
・
・
・
・
・

『お嬢様、朝で御座います、学校への身支度を御整え下さいませ』

紬「ん・・・ん・・・もう朝なの？」

全身を襲う倦怠感・・・

何もしたくない、そんな考えが頭を支配して寝返りをするのも辛
いわ・・・

あれ？ どうして私は制服のまま寝てるのかしら？

寝起きの頭では考えが纏まらないけど、とりあえず私はシワだらけになった制服を新しい物へと着替え食卓に向かいました。

『おはようございますお嬢様、昨日は竹下様が風邪でお休みになられてたようですが、本日の放課後は何人分のケーキをご用意致しますしょう?』

紬「そうね、葵ちゃんの容態は酷いみたいだから今日も休むと思うけど、余ったら栞ちゃんが『私が食べます!』って言うと思うし、いつも通り30人分お願いね」

『はい、承知致しました』

紬「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何、今の記憶は・・・

深く考えないのに自然に出てきた言葉・・・

ちょっと待って、何かがおかしいわ・・・もう一度冷静に思い出して・・・

私は桜ヶ丘高校に入学して音楽室でりっちゃんと出会って軽音楽部に入部して・・・

2年に進級した時に梓ちゃんが入部してきて・・・

うつん・・・違う・・・そうじゃないわ・・・

私は音楽室に行った後、第2音楽室で合唱部に入部届けを出した

のよ！

合唱コンクールで入賞してみんなで喜んだのも覚えてる・・・
学園祭での発表が成功して先輩と一緒に泣いたのも覚えてる・・・
3年生になって部長になった事も、新入生への歓迎会も全部覚えてる・・・

可愛い後輩達も顔も、みんなの名前も思い出せるもの・・・

でも・・・

だとしたら軽音楽部の記憶は何だったの？・・・
夢で見た事を現実と勘違いしてるだけ？

昨日は訳が分からなくなって逃げ出しちゃったけど、学校に行けば何が正しいのか分かる筈だわ・・・

そう思った私は急いで身支度を済ませ学校へと向かいました。

唯「絢ちゃんおはよう！ もう体調はいいの？」

絢「おはよう平沢さん」

「あつ！ 琴吹先輩！ おはようございます」

「部長、もう大丈夫なんですか？」

絢「あら、おはよう栞ちゃん、瞳ちゃん」

「先輩、昨日はどうしたんですか？ 軽音部の部長から急に具合が悪くなったって聞きましたけど」

紬「うん・・・もう大丈夫だから」

「部室のコンロが壊れて第1音楽室に借りに行くって出掛けたま戻ってこないから心配してたんですよ」

「私、部長がそんなに疲れていたなんてちっとも気が付かないで・・・私・・・うええええん」

「ちよつと栞、泣かないでよ」

紬「栞ちゃん、心配かけてごめんなさいね」

私はなんてバカなのかしら・・・

何が正しいかなんて考えるまでもなかったのに・・・

わずかな時間とは言え、こんなに可愛い後輩の事を忘れるなんてどうかしてたわ。

紬「栞ちゃん、本当にもう大丈夫だから泣かないで、今日も美味しいケーキを用意してあるから放課後を楽しみにしててね」

「本当ですか！」

「栞の食いしん坊！ 今まで泣いてたくせに」

「なによー！」

紬「うふふ、2人とも早くしないと授業が始まっちゃうわよ」

「はい」

可愛い後輩の後姿を見送って、私も平沢さんと一緒に教室へと向かいました。

唯「可愛い後輩さんだねえ」

紬「うん」

唯「紬ちゃん昨日は少し態度が変わったから合唱部で何かあったのかなあ〜って心配してたんだよ」

紬「ごめんなさいね・・・私、何だか夢を見てたみたいで・・・少し混乱してたのかもしれないわね」

唯「夢？」

紬「もしかしたら今が幸せ過ぎるから心のどこかで無意識に、これは現実じゃないのかもしれない、もし違う道を選んでいたらどうなっていたのかしらって・・・そんな変な事を考えてたのかもしれないわ」

唯「ふう〜ん、難しい事は良くわかんないや」

紬「うふふ、実は私もよく分かんないの」

唯「あははは・・・でも・・・」

紬「????」

唯「だとしたら、今こうして紬ちゃんとお話してるのって現実なのかな？ 夢なのかな？」

え？ 平沢さんは何を言ってるの？

口元は笑って話しているのに、心なしが表情が冷たいような・・・

唯「紬ちゃんの話聞いて昔に読んだ物語を思い出したんだけど」

紬「物語って？」

唯「えつとね・・・主人公が蝶々になった夢を見るんだけど、目が覚めた時にふと『今見ている世界は本当に現実なんだろうか？ もしかしたらこれは人間に憧れている蝶々が見ている夢で、本当の自分は蝶々なんじゃないか？』って考えちゃうの」

紬「ふん、面白いお話ね、それって絵本なの？」

唯「ん・・・あんまりよく覚えてないや」

紬「だけど、今こうして平沢さんとお話してるのは現実だし、合唱部で感動した思い出も全部本物だもの、夢なんかじゃないわ」

唯「でも夢って見ている時は夢だって気付かないで、感動して涙を

流したりするよね・・・それって現実で感動するのと同じ違うのかな？」

紬「平沢さん・・・何が言いたいの？　今私がいる世界、これは現実よ」

唯「そう・・・じゃあ私とライブで演奏した思い出は忘れちゃうんだ・・・」

紬「！！！！！！」

今の平沢さんのセリフは何？

どうして私が軽音学部の夢を見ていた事を知ってるの？

それに・・・『思い出を忘れちゃう』ってどう言う意味？

あ・・・頭が痛い・・・

意識が・・・

・

・

・

【ムギちゃん・・・】

・

・
【おい！　しっかりしろムギ！】

・
・
・
・
・

紬「こ．．．ここは？．．．」

唯「ムギちゃん気が付いたの？！　ここは病院だよ！」

律「ムギ！　部室に来てみたら倒れてたから心配したんだぞ！」

漣「梓！　急いでお医者様を呼んで来て！」

梓「はい！」

紬「平沢さん、田井中さん、それに秋山さんまで揃って．．．一体何を言ってるの？」

律「た．．．田井中さんって．．．」

唯「ムギちゃんどうしちゃったの！　いつもみたいに唯ちゃんって呼んでよ！」

梓「先輩！　先生を呼んで来ましたよ！」

『気が付かれましたか、気分はどうです？　あなたは自分が誰だか分かりますか？』

紬「え？・・・私は琴吹紬・・・桜ヶ丘高校の3年で・・・合唱部の部長・・・です・・・」

唯「！！！！！！」

梓「ムギ先輩！　何言ってるんですか！」

唯「ムギちゃんは合唱部なんかじゃないよ！　軽音部の・・・私達の仲間だよ！」

律「ムギ・・・冗談じゃなく本気で言ってるのか？」

や・・・止めてよ・・・

どうしてみんな変な事ばかり言うの！

私は合唱部の部長よ！　軽音楽部に入ってたって言うのは夢なんだから！

もうこれ以上変な事を言っで苦しめるのは止めて！

みんなが・・・

可愛い後輩が待ってるの！

お願い！ 誰でもいいから私を現実の世界に戻して！

- 後編 -

紬「……………」

『お嬢様、お目覚めになられましたか？』

斉藤……

ここは私のお部屋なの？……と言う事は、やっぱり今の出来事は夢？

よかった、また合唱部のみんなと歌えるのね。

でも……この何日も眠っていたような感覚は何なのかしら？

今日は何日の何曜日なの？

とにかく急いで学校に行く準備をしなきゃ！ みんなが待ってるもの。

『いけませんお嬢様！ そんな急に起きようとされてはお体への負担が！』

紬「・・・・・・・・」

これって何？

確かにまだ頭の中は霧がかかったみたいに混濁してるけど意識はあるわ・・・なのに・・・体が思うように動かせない・・・

『お嬢様はお体が弱いので御座いますから、無理をなさらずに横に成られて下さいませ』

紬「・・・・・・・・」

起きようと上体を持ち上げただけなのに、どうしてこんなにも息が苦しいのかしら・・・

心配そうに見つめる斉藤を安心させる為に私はベットに横たわりました。

少し時間を置いて心なしか体が少し楽になったような気がしたので、私は気になっている学校の事や後輩の事を尋ねてみました。

紬「ねえ斉藤、私はどれくらい学校を休んでるのかしら？ 何日も休んでるんだとしたら早く行かなきゃ・・・可愛い後輩が・・・葵ちゃんや栞ちゃんが心配するもの」

『葵様と栞様・・・ですか？』

紬「どうしたの斉藤・・・いつも学校にお菓子を届けてくれる時に

私の横に髪の毛の長い子と黄色いリボンを付けた子が居たでしょ？ 覚えてないの？」

『お嬢様……』

どうしてそんな悲しそうな目で私の事を見るの？

まさか……まさかまさか！ 合唱部の出来事は夢だなんて言うんじゃないわよね？！

何が夢で何が現実なのか確かめる方法はないの？

紬「だったら平沢さんは！ 唯ちゃんは？！」

『……平沢唯様でしたらお名前だけは存じ上げております』

良かった、斉藤が唯ちゃんの事は知っている……

と言う事は合唱部が夢で、現実の私は軽音楽部に居るって事なの？

確かめたい……今すぐ唯ちゃんとお話して全てを確かめたい！

紬「斉藤……唯ちゃんに会いたい……会ってお話をしたいの」

『お嬢様……それは無理で御座います……』

紬「どうしてなの？ 確かに『学校をサボって私の家まで来て』なんて、自分勝手な事を言ってるのは分かるけど1回くらいいいじゃ

ない！」

『そうではなく、御学友でも無い方を無理強いしてお屋敷にお連れする事は出来ないと申し上げているので御座います』

絀「な・・・何を言ってるの・・・意味が分からないわ」

唯ちゃんがお友達じゃない？

だったらどうして斉藤が唯ちゃんの名前を知ってるのよ・・・

その時、窓の外から聞きなれた声が聞こえてきました。

『唯、早くしないと遅刻するぞ！』

『待つてよりっちゃん！ 寝不足で疲れてるんだからあ』

『どうせ夜中までゲームでもしてたんじゃないのか？ そう言うのを自業自得って言うんだぞ』

『そうそう、澪の言う通り』

『そんなあ・・・2人とも酷いよあ』

『あはははは』

唯ちゃん！

それに澪ちゃんとりっちゃんの声もする！

みんな！ 私はここに居るわ！ お願いだから早く来て！
体が自由に動かせない私は大声で叫びました。

『お嬢様落ち着いて下さい！ 興奮されますとお体に障ります！』

紬「だったら今すぐ唯ちゃんを連れてきてよ！」

『ですからそれは無理な事だと申し上げて・・・』

紬「どうしてなの！ 斉藤は唯ちゃんを知ってるんでしょ？ 私は
同級生に・・・軽音部のお友達に会いたいただけなのにどうして意地
悪するのよ！」

『お嬢様！ お気をしっかりと持ち下さい！ お嬢様は桜ヶ丘
高校と言う所へ通われた事は一度も御座いません！』

紬「え？・・・」

『わたくしが唯様のお名前を存じ上げているのは、この部屋で毎
日お嬢様と一緒に窓の外から聞こえてくる楽しそうな話し声を聞いて
いたからで御座います』

紬「嘘・・・そんな事聞きたくない」

『お嬢様は生まれつきお体が弱く・・・』

・・・学校へ通う事が出来ないために・・・

・・・窓の外から聞こえる声にご自分を重ねて・・・

・・・お嬢様は唯様と会われた事は御座います
せん』

斉藤が一生懸命何かを言ってるわ・・・

でも何を言ってるのか、今の私には分からない・・・言葉も耳に入ってこない・・・

結局、合唱部で可愛い後輩達と過ごした楽しい思い出も・・・
軽音部で唯ちゃん達と過ごした幸せな思い出も・・・

両方とも夢だったのね・・・

病弱だからお屋敷から外に出られない？

お友達が居ないから頭の中で想像していただけ？

これが現実だって言うの？

こんな酷い事が現実だって言うなら、どうして私は目を覚ましてしまったの！

目覚めたいなんて思わなければ良かった・・・

もしも永遠に目覚めない夢があったとしたら、それは現実とどう違うと言うのかしら・・・

夢だと分からないまま見続ける夢・・・それはもう現実と同じじゃないの？

幸せな夢と残酷な現実なら、私は幸せな夢を選びたい・・・

みんなの所に戻りたい・・・

『お嬢様？ どうされました？』

紬「斉藤・・・今は静かに考えたいの・・・悪いけど一人にしても
らえるかしら」

『・・・分かりましたお嬢様』

一人になった私の頭の中はみんなの所に戻る事しか思い浮かんで
来ませんでした。

これは現実逃避なんかじゃないわ、みんなとの思い出が夢だなん
てありえないもの・・・

そうよ！ どう考えてもこっちが夢に決まってるわ！

ううん・・・もうどっちが夢とかそんなのはどうでもいいの。
みんなと幸せに暮らしてる世界が現実・・・それでいい・・・

これを飲めば現実に戻れる。

そう、これはみんなの所に戻る為のアイテム・・・

みんな、待っててね・・・今すぐに戻るから・・・

・

・

唯「ムギちゃん大丈夫？」

紬「ゆ・・・唯ちゃん・・・」

唯「私の事覚えてる？」

紬「当たり前じゃないの、唯ちゃんの事を忘れる訳ないじゃない」

唯「えへへへ、そうだよね、でも少し心配だから迎えにきちゃった」

紬「ありがとう唯ちゃん」

「琴吹先輩、私達の事は覚えてますか？」

紬「葵ちゃん、栞ちゃん・・・私の大切な後輩だもの、ちゃんと覚えてるわよ」

「部長〜！ 私嬉しいです！」

唯「へえ〜、ムギちゃん今度は私の事も、この子達の事も覚えてるんだ」

紬「うん・・・唯ちゃんも葵ちゃんも梨ちゃんも、みんな私の幸せには欠かせない存在だから・・・これが私にとっての現実だから」

唯「どちらも大切だなんて、ムギちゃんは欲張りさんだね」

「本当ですよ・・・でも優しい琴吹先輩が戻って来てくれて嬉しいです」

唯「じゃあ改めて・・・おかえりムギちゃん」

「おかえりなさい部長」

「琴吹先輩、おかえりなさい」

紬「ただいま・・・みんな」

- 後編 - (後書き)

今まで書いてきた作品とは違う、不思議な世界の中で少し切なさの漂う……そんな雰囲気の記事を書いてみたくなって挑戦してみたのですが……

改めて頭の中で考えた物を文章にする難しさを痛感しました。

色々と疑問点を残したまま B a d e n d になってしまったような気がします、良くも悪くも今後記事を書くに当たっての勉強の為に残したいと思っています。

これからも投稿する記事をお読みいただければ幸いです ^ - ^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0355s/>

けいおん！ - 目覚めぬ夢 -

2011年5月21日03時16分発行